

愛郷心

2023. 10. 8

イタリアにシチリアという島がある。州都は、最大の都市でもあるパレルモである。その人に聞くと、「私はまずパレルモ人、次にシチリア人、そしてヨーロッパ人、最後にイタリア人だ」と誇らしげに語る。イタリア国家は、統一されてまだ160年ほどである。したがって、国家への帰属意識は弱い。まだ愛国心よりも愛郷心が先なのである。

これを福島で考えてみる。「私はまず福島人、次に東北人、そしてアジア人、最後に日本人だ」となる。どうだろうか。じっくりこないだろう。個人的な感覚だが、東北人と日本人には思い入れがあるように思う。

イタリアで不思議なのは、サッカーのナショナルチームがプレーするときだけは、なぜか皆が「イタリア人」になることである。日頃、セリエAのサッカーの試合などまったく見ないのに、ナショナルチームの試合だけは燃えるという人がいる。サッカーに興味がないのかと思いきや「サッカーは嫌いだ。ナショナルチームが好きなのだ」と奇妙な答えが返ってくる。結局は、どこかで皆がイタリア人としての心の拠り所を求めているのかもしれない。国としての誇りが継続的なものではなく、一時的に盛り上がるものであるというのは、いかにもイタリアらしい。

日本はどうだろうか。実は似たような現象が起きている。WBCワールドベースボールクラシックである。日頃、野球など見ない人でも、ルールがよくわからない人でも、あの試合に一喜一憂し、最後は感動したのではなかろうか。サッカーの世界カップもそうである。日本のサッカーが、ドイツとスペインに勝つなど、誰が想像できただろうか。ラグビーはどうだろう。日本代表チームのメンバーは、以前とは様変わりして、様々な国にルーツをもつ選手の集まりとなっている。にわかラグビーファンも多いかもしれない。とにかく日本代表を応援している。日本代表が好きなのである。スポーツは、日本人が日本人としての一体感を得ることができる貴重な機会である。

イタリアだけでなくヨーロッパの国々は、わが町の意識が強い。都市国家としての歴史もある。それが、わがサッカーチームの熱狂的な応援となる。日本でも、サッカーやバスケットボールなどでわがチームの意識は強くなってきている。そもそもプロ野球における阪神ファンのような土壌もある。

スポーツなどを通して、日本人も、今まで以上に、自分のわが町を愛するようになってくるかもしれない。愛郷心である。自分が生まれた町、育った町、住んでいる町を誇りに思い、自慢できるようになってくれればと願う。「私はまず〇〇人」と言えるようになりたい。